第八節　山城切の位置

一

山城切は大和綴の冊子本として伝来したが、昭和十四年に京都で分割され、その際、裁断の地である山城国に因み、山城切と名付けられた。伝称筆者は藤原定頼（九九五―一〇四五）であるが、実際の書写年代は定頼の時代よりやや下り、「一一二〇年代、崇徳天皇のころ」とされている。[1]

かつて堀部正二氏は、山城切は雲紙本・関戸本と「同類の親本より発して相別れて成長したもの」[2]であり、その本文内容については「古本系統の面目を保有」している一方、「平安朝後期より漸次変形転訛を来し始めた朗詠集本文の過渡的相貌を示す」と説かれた。[3]

平安時代、調度品として制作されたと思しき伝本が多い中、豊富な傍書・注記を有する点において山城切は他本と異なる。本節では主に、堀部氏の御論について改めて検討を行った結果について述べるとともに平安時代の書写とされる諸伝本における山城切の位置について論じる。

二

まず、詩歌句の有無に関する考察結果について述べる。

調査し得た平安時代の書写とされる諸伝本間に見られる詩歌句の有無の異同（断簡等、切り取られたもの、及びその可能性のあるものについては除外する）のうち、山城切の脱落の三葉（二二首〈388～395・680～693〉）を除くと山城切に無いのは四首（344の次[4]・652の次・678・735の次）であり、また「後人の追補」とされている[5]次の七首を山城切は有する。当該箇所を挙げ、詩歌句の有無を示し、括弧内には諸伝本の略号を挙げる。

①92の次有（山）
　無（雲・関・粘・伊・久・唐2・巻・多・戊・葦）
②323の次有（山）
　無（行大・雲・関・粘・伊・久・巻・和1・多・戊・葦）
③376の次有（山）
　無（雲・関・粘・伊・久・巻・戊・葦）
④422の次有（山・益）
　無（雲・関・粘・伊・久・巻・下・戊・葦）
⑤434の次有（山・伊・太・大内）
　無（雲・関・粘・久・巻・戊・葦）
⑥736の次有（山）
　無（雲・関・粘・近・伊・久・安・巻・太・多・戊・葦）
⑦803の次有（山）
　無（雲・関・粘・近・法・伊・久・安・巻・太・益・多・戊）

右のうちの五首（①・②・③・⑥・⑦）は平安時代書写本においては山城切独自のものである。

山城切の形態について、堀部氏は、「或いは公任撰原著の面影を山城切のみが脱漏なく完全に保存してきた為かも知れないが、恐らくはそれ以外の理由」、つまり「諸系統との混合接触に因由してゐるものではなかろうか」[6]と述べられた。他本では例えば右のうちの⑤「434の次」が無い伝本（雲紙本・関戸本・粘葉本・久松切・巻子本・戊辰切・葦手本）は434を有しており、「434の次」を有する伝本（伊予切・太田切・大内切）には434が無い。しかし、平安時代書写本において山城切に限っては

その両方の和歌を有しており、その事実からもそのことは首肯される。

一方、排列においては、諸伝本間にみられる異同のうち、一本のみが異なる場合を除外してみると以下の通りである。当該箇所を挙げ、異同を示し、括弧内には諸伝本の略号を挙げる。

(1) 110・111（山・雲・関・粘・伊・久・巻・戊）
111・110（唐2・葦）

(2) 137〜143・133〜136［躑躅・款冬・藤］（山・雲・関・巻・戊・葦）
133〜143［藤・躑躅・款冬］（粘・伊）

(3) 201・202（山・粘・伊・久・巻・戊・葦）
202・201（雲・関）

(4) 273・272（山・雲・関・久・唐2・巻・戊・葦）
272・273（粘・伊・多）

(5) 309・308（山・雲・関・久・戊・葦）
308・309（粘・伊）
308無（巻）

(6) 312・313（山・粘・伊・久・戊）
313・312（雲・葦）
313無（関・巻・和1）

久曽神氏が［粘葉本系統と雲紙本系統の最も著しい相違］[7]箇所とされた巻上・春部巻末の三詩歌群［躑躅・款冬・藤］の排列（右のうちの(2)）については山城切は雲紙本類と同じである。当該箇所を含め、山城切の雲紙本類との一致箇所数は四か

所（⑴・⑵・⑷・⑸）であるが、山城切は粘葉本類とも一致しており（三か所（⑴・⑶・⑹）が確認される）、粘葉本類の要素をも有していることが確認される。

また、山城切一本のみが他本の排列と相違する事例を挙げると以下の通りである。当該箇所を挙げ、異同を示し、括弧内には諸伝本の略号を挙げる。

①269・270・271・268（山）
268無・269・270・271（雲・関）
268・269・270・271（粘・伊・戊・葦）
268・270・271・269（久）
268・269・270・271無（巻）

②466・465（山）
465・466（雲・関・粘・近・伊・久・巻・太・戊・葦）

③473・472（山）
472無（雲）
472・473（関・粘・近・伊・久・巻・太・下・戊・葦）

④615・616・617・618と619後部の合成・620・621・622・619前部（山）
615無・616・617・618無・619・620・621・622（雲）
615・616・617・618・619・620・621・622（関・粘・伊・戊・葦）
615・618・619・620・621・622・616・617（久）

615・616・617無・618・619・620・621無・622（安・巻）
616・617・618（法）
615・616・617（唐1・下）
619・620（多）
⑤730・729（山）
729無（雲・関）
729・730（粘・近・伊・久・安・巻・太・戊・葦）
⑥741・742・744・743（山）
741・742・743・744（雲・関・粘・近・伊・久・安・巻・太・戊・葦）
741・743・742・744（多）
741・742・743無・744無（葦）

山城切独自の排列の揺れについて、堀部氏は「多くは遺憾ながら山城切の錯誤と考へざるを得ない」[8]と述べられた。しかし、右の六項目のうち、雲紙本五か所［①・③・④・⑤］・関戸本二か所［①・⑤］・巻子本三か所［①・④］等、雲紙本類に無いことが知られる。

巻子本、及び久松切にも同様な事象が確認される。いずれも当該伝本の独自の排列の揺れている箇所に雲紙本類に無い詩歌句が目立つ。このことは偶然とは思えない。転写の際、雲紙本類に無い詩歌句が、例えば、異本注記のような形で（欄外などにも）書き込まれるなどして、その部分がいつしか本文化されて排列に揺れが生ずるごとき形に変移していったとは考えられまいか。

以上、山城切は脱落の三葉を除くと「追補」ともされている七首を含め、多くの詩歌句を有し、集成的といえる。また、

排列について、巻上・春部巻末の三詩歌群［躑躅・款冬・藤］をはじめ、山城切は雲紙本類との一致も確認された。しかし、粘葉本類との同要素をも有していた。

三

個々の本文を考察した結果について述べる。

和歌は一句、漢詩は一文字を単位として異同調査を全本文に亘って行った。その際、異体字・略字等について、また、和歌では漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等について異同とは見做さないこととした。また、後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等については原則、対象外とした。

その結果が次の【諸伝本間の本文異同調査表】であり、斜線の左は和歌、右は漢詩を示し、上と右に記した略号の結ばれた欄をそれぞれ三段に分け、上段にはその二本間における対照箇所数を、中段には同文箇所数を、下段にはその対照箇所数に対する同文箇所数の割合を％で表した。

同表によると、和歌は山城切と関戸本との関係は七一・〇％と最も高く、次いで、雲紙本六九・一％が挙げられる。最も低いものには雲紙本類と対立した関係にある粘葉本類の粘葉本五三・四％、伊予切五五・六％である。しかし、漢詩においては、山城切と雲紙本・関戸本は七六・六％、七四・八％であり、粘葉本八〇・一％、伊予切七九・七％よりも低い。そこには他本と対立して雲紙本と関戸本の二本のみが同文であるいわゆる共通異文例が三九か所も存するということに加え、山城切の独自性の強さ（山城切の独自本文数：和歌四四か所、漢詩五四か所）が起因していると考えられる。

そのことを踏まえた上で、改めて異同箇所について検討してみると、山城切は以下のごとく雲紙本類の本文を多く有しているといえる。山城切の本文を挙げ、以下、異同を示す。括弧内には当該本文を有する諸伝本の略号を載せる。

□36あすからは（山・雲・関・久・唐2・巻・戊・葦）

【諸伝本間の本文異同調査表】

歌／詩	雲紙本	関戸本	粘葉本	近衛本	法輪寺切	伊予切	久松切	巻子本	山城切	戊辰切	葦手本
雲紙本		284	281	103	36	283	277	282	278	279	283
		265	184	67	26	191	208	212	192	184	201
%		93.3	65.5	65.0	72.2	67.5	75.1	75.2	69.1	65.9	71.0
関戸本	759		281	103	36	283	277	282	278	279	283
	705		182	65	28	189	205	211	197	182	202
%	92.9		64.8	63.1	77.8	66.8	74.0	74.8	71.0	65.2	71.4
粘葉本	763	827		103	34	283	276	279	277	276	280
	559	585		94	33	266	220	183	148	179	184
%	73.3	70.7		91.3	97.1	94.0	79.7	65.6	53.4	64.9	65.7
近衛本	414	450	459		32	105	105	103	101	103	102
	313	315	432		31	94	86	60	60	72	69
%	75.6	70.0	94.1		96.9	89.5	81.9	58.3	59.4	69.9	67.6
法輪寺切	146	149	152	131		36	36	36	35	36	36
	112	109	146	121		33	29	24	21	24	27
%	76.7	73.2	96.1	92.4		91.7	80.6	66.7	60.0	66.7	75.0
伊予切	763	827	842	459	152		278	281	279	278	282
	559	583	809	428	149		227	194	155	183	192
%	73.3	70.5	96.1	93.2	98.0		81.7	69.0	55.6	65.8	68.1
久松切	754	822	835	459	151	835		275	273	272	276
	556	585	699	379	125	686		201	175	193	208
%	73.7	71.2	83.7	82.6	82.8	82.2		73.1	64.1	71.0	75.4
巻子本	751	817	830	452	147	830	825		276	277	281
	430	455	532	285	86	530	526		170	187	200
%	57.3	55.7	64.1	63.1	58.5	63.9	63.8		61.6	67.5	71.2
山城切	738	806	819	444	151	819	814	809		273	277
	565	603	656	344	121	653	657	508		156	168
%	76.6	74.8	80.1	77.5	80.1	79.7	80.7	62.8		57.1	60.6
戊辰切	755	823	834	458	149	834	829	824	813		278
	583	609	716	388	122	714	696	561	669		205
%	77.2	74.0	85.9	84.7	81.9	85.6	84.0	68.1	82.3		73.7
葦手本	740	807	817	439	145	817	812	807	796	813	
	534	561	633	350	121	631	625	515	598	682	
%	72.2	69.5	77.5	79.7	83.4	77.2	77.0	63.8	75.1	83.9	

はるたたは（粘・伊）

『万葉集』巻八。当該箇所、「明日従者」（『夫木抄』巻一も）。『新古今集』巻一・『三十六人撰』には「あすからは」とあり、山城切・雲紙本類と同文である。それに対して粘葉本類の「はるたたは」は、『赤人集』Ⅰ・『古今六帖』第一にみられる本文である。

試みに本文において他の伝本が同文であるのに対して、雲紙本・関戸本と、ある一本の計三本のみが一致している場合について調査してみると、その一本には、和歌は、山城切（九か所）、巻子本（一か所）、漢詩は、山城切（九か所）、久松切・戊辰切・下絵切（二か所）、巻子本・葦手本（一か所）が挙げられ、山城切が多いことが知られる。その事例をいくつか挙げると以下の通りである。

①33ねのひして（山・雲・関）
　ねのひしに（粘・伊・久・唐2・巻・多・定大・戊・葦）
②125さくらはな（山・雲・関）
　やまさくら（粘・伊・久・巻・戊・葦）
③196年（山・雲・関）
　歳（粘・伊・久・巻・下・多・戊・葦）
④264餌（山・雲・関）
　飡（粘・伊・久・巻・大内・戊・葦）
⑤366をりそかなしき（山・雲・関）
　をりそわひしき（粘・伊・久・巻・下・戊・葦）
⑥370聲（山・雲・関）

音（粘・伊・久・巻・戊・葦）

⑦500ナシ（山・雲・関）

之（粘・近・伊・久・巻・太・戊・葦）

⑧658砂（山・雲・関）

沙（粘・近・伊・法・久・安・巻・戊・葦）

⑨718ふきとちき（山）

ふきとちき（雲・関）

ふきとちよ（粘・近・伊・久・安・戊・葦）

ふきとめよ（巻）

その一方、山城切は次のごとく粘葉本類の本文をも多く有していることが知られる。

□15たるひのうへの（山・粘・伊・戊・葦）

たるみのうへの（雲・関・久・唐2・巻）

『万葉集』巻八には、滝の意の「垂見」とあり（『新古今集』巻一も）、雲紙本類と同文であるが、『古今六帖』第一・『夫木抄』巻三には山城切・粘葉本類の本文「たるひ」（つららの意）とある。

山城切が粘葉本類の本文を有している点に関して、堀部氏は、「関戸家本と相異する箇所にして御物粘葉装本の一類と合致する所も多いのであるが、それと山城切との関係は、未だ稀薄と考へざるを得ない底のものであるにすぎない」[9]と述べられた。しかし、山城切と粘葉本類との混淆に因ると考えられる本文が少なからず見受けられるのである。以下、それを示す事例を挙げる。

◇292壠隴（山）

壠（粘・伊・久・大内・多・戊・葦）
隴（雲・関・下）
壠（巻）

粘葉本類では「壠」、雲紙本類では「隴」であるが、山城切には両類の二字混合の本文が存する。なお、『本朝文粋』巻十三「供養自筆法華経願文　前中書王」の当該箇所では粘葉本類の本文「壠」である。

◇296閑寞（山）
閑寂（粘・伊・久・巻・多・戊・葦）
寂寞（雲・関）

山城切の本文は粘葉本類の一字目「閑」と雲紙本類の二字目「寞」が合成されたともとれる本文「閑寞」である。

◇741 (a)独徒（山・多）
独（粘・伊・巻・安・久・太）
徒（雲・関・戊）
猶（近）
(b)将（雲・粘・近・伊・巻・安・久・多・太・戊）
以将（山）
以（関）

『白氏文集』巻三「格詩謌行雑体　題故元少尹集後二首」。当該箇所、(a)「徒」・(b)「将」。山城切の(a)では、粘葉本類の本文に傍書として雲紙本類の本文が注された形である。山城切の(b)では関戸本の本文に傍書として雲紙本・粘葉本類の本文が注された形である。

◇742襟滿（粘・近・伊）
　滿襟　衫（山）
　滿衫（雲・関・久・安・巻・太・戊）
　滿襟衫（多）

『白氏文集』巻六十四「微之　敦詩　晦叔相次長逝巋然自傷因成二絶」。当該箇所には「滿衫」とある。山城切では当該句（一行目）の行末に「衫」が書き込まれている。

以上のごとく他本との照合等により書き込まれる中で竄入し、その結果、本文化されたものが山城切には存すると思われる。それは山城切の本文中、随所にみられる小字による書込みの存在からも窺われる。そこでは、

□364日夜（山）
　日（雲・関・久・下・葦）
　夜（粘・伊・巻・戊）

のごとく雲紙本類の本文に粘葉本類の本文を注す事例、及び、

□416魏景陽宮（山）
　魏宮（粘・伊・久・太・益・戊）
　景陽（雲・関・巻・葦）

のごとく粘葉本類の本文に雲紙本類の本文を注す事例も見受けられる。また、

□375里界（山）
　里（雲・関・粘・伊）
　界（久・巻・下・戊）

眼（葦）

のごとく粘葉本・雲紙本両類とは別の本文が注される場合もある。

なお、山城切には単純な書き誤りであると思われる独自本文が散見されるが、山城切の傍書を検討してみると、誤写の訂正のことよりもむしろ異文を注すことの方に書写者の関心は向けられていたと思われる。

その一方、本章中、述べたごとく、山城切と十二世紀の書写とされる諸伝本間には横の繋がりが確認される。当該伝本と山城切とが同文である事例を以下、示す。因みに次の①・③・⑤・⑦・⑧・⑩の山城切の本文は堀部正二氏により「後世的要素」[10]とされたものである。

①169をきまさるらん（山・戊）
　おかむとすらん（雲・関・粘・伊・久・巻・和1・葦）

②345止（山・下）
　了（雲・関・粘・伊・久・巻・戊・葦）

③511鋪（山・久）
　敷（雲・関・粘・近・法・伊・巻・戊・葦）

④558鷺（山・下）
　鴎（雲・関・粘・近・伊・久・巻・多・戊・葦）

⑤559暮（山・久）
　落（雲・関・粘・近・伊・巻・多・戊・葦）

⑥619舳（山・多）
　舷（雲・関・粘・伊・戊・葦）

棹（久・安）
船（巻）

⑦640かなしかるへき（山・葦）
かなしからまし（雲・関・粘・近・伊・久・巻・多・戊）
くるしかるへき（益）

⑧673いかるかや（山・久）
いかるかの（雲・関・粘・近・伊・巻・多・戊・葦）

⑨749かけしとおもふを（山・多）
かけしとおもへと（雲・関・粘・近・法・伊・久・安・巻・戊・葦）
かけてとおもへと（太）
かけしとそおもふ（俊和）

⑩753躔（山・久）
宿（雲・関・粘・近・伊・安・巻・太・多・戊・葦）

⑪753未（山・戊）
曷（雲・関・粘・近・伊・久・安・巻・太・多・葦）

以上、山城切は雲紙本類の系譜上に位置することが改めて確認されたが、その一方、粘葉本類の本文をも有していた。また、山城切と同様、十二世紀の書写とされている諸伝本との間に横の繋がりがあることも確認された。山城切が広く諸伝本の本文と共通性を有しているのは堀部氏の御指摘の通り[11]、他本との接触がなされたことに因ると思われる。

四

注記[12]について述べる。山城切と雲紙本・関戸本の三本のみが同一である注記の事例が目立つ。以下、それらのうちのいくつかを挙げ、異同を示す。括弧内には当該注記を有する諸伝本の略号を載せる。

■1立春日内宴進花賦（山・雲・関）
　立春日内園進花賦（粘・伊・久・葦）

■471題故元少尹集後 白（山・雲・関）
　題故元少尹後集 白（粘・近・伊・久）
　白（戊・葦）

■600弘徽殿御八講五巻日　邑上御製（山・雲・関）
　邑上御製（粘・戊・葦）
　弘徽殿御八講五巻 村上御製（久）
　ナシ（伊・太）

■602採佛材木詠 傅教大師（山・雲・関）
　伝教大師（粘・大内・戊・葦）
　採仏材詠 伝教大師（近・伊・太）
　採佛材 伝教大師（久）

■640遊女白目（山・雲・関）
　ナシ（粘・近・伊）
　餞□實赴□西 遊女白女（久）

遊女白女（益・多・戊・葦）

次に、山城切と雲紙本類とが相違するところについて述べる。雲紙本と関戸本の注記内容が同一であり、かつ、山城切と雲紙本類との間に異同がある場合は次のように分類される。それぞれの事例数を示し、項目ごとに当該事例を一例ずつ示す。

(a)山城切…題詞等・作者名有、雲紙本類…題詞等 無・作者名 有→三一例

◆71宮鶯囀暁光　菅三品（雲・関・粘・伊・大内・戊・葦）

菅三品（山・久・唐2・多）

(b)山城切…題詞等 無・作者名有、雲紙本類…ナシ→二七例

◆127白（山・粘・伊・久・行金・戊）

ナシ（雲・関）

同（葦）

(c)山城切…ナシ、雲紙本類…題詞等 無・作者名 有→一一例

◆19ナシ（山・俊大1・戊）

劉（雲・関）

劉禹錫（粘・伊・久・葦）

劉禹（唐2）

(d)実質的異同→五例

◆508白（山）

江（雲・関・粘・近・伊・戊・葦）

江相公春日山庄（久）

同前　江（多）

(e)非実質的異同（表記上の異なり、及び誤写とみられるものも含む）→三七例

◆161恒寂師房 白（山・久・葦）

恒寂師房 已上白（雲・関）

白（粘・戊）

ナシ（伊）

右のうちの(d)「実質的異同」とは、内容的に異なるものを指す。その事例の全て（五例）を挙げると以下の通りである。まず、山城切の注記を挙げ、以下、異同を示す。括弧内には当該注記を有する諸伝本の略号を載せる。

(1)122花少鳥亥稀 保胤（山）

相規（雲・関・粘・伊・戊・葦）

花少鳥亦稀 相規（久）

(2)427源敏行（山）

源致行（雲・関・戊・葦）

源宗于（粘・法・伊・久・益）

源宗行（太）

(3)508白（山）

江（雲・関・粘・近・伊・戊・葦）

江相公　春日山庄（久）

同前　江（多）

(4)563敏行（山）
　致行（雲・関）
　ナシ（粘・近・伊・久・大内・下・多・戊・葦）
(5)627直幹菅三品（山）
　直幹（粘・近・伊・多）
　菅三品（雲・久）
　菅三（関・戊）
　菅（葦）

右のうちの(2)は『古今集』春上、源宗于の和歌であり、山城切の「敏行」は誤謬である。雲紙本類では「源致行」であるが、(4)にも山城切「敏行」、雲紙本類「源致行」とある。(4)は『古今集』雑下、よみ人しらずの和歌である。『和漢朗詠集』中、その次の位置に存する564が源宗于の和歌であることから山城切では目移りにより「敏行」という誤写がなされたかとも想像される。また、右のうちの(2)に照らし、山城切と雲紙本類とは何らかの関係があるように思える。

右のうちの(1)について、『和漢朗詠集私注』[13]（以下、『私注』と略称）には源相規の記載があり、(3)では『屏風土代』に大江朝綱の作品として載る。(3)については、『和漢朗詠集』における当該句が存する位置から白、すなわち白居易とは考えにくく、本注記は山城切の誤謬であると思われる。

また、(5)については、山城切には「直幹」に「菅三品」が併記されている。『私注』には「遊崇福寺　直幹」とあるが出典不明である。

前掲(a)・(b)の事例数の多さから山城切の注記の詳細さが見て取れるが、次に挙げる山城切独自の注記からもそのことが窺われる。まず、山城切の注記を挙げ、以下、異同を示す。括弧内には当該注記を有する諸伝本の略号を載せる。各項目の末

尾には他文献も載せる。

①130落花還繞樹　菅三品（山）

文時（雲・関）

菅三品（粘・伊・戊・葦）

＊『私注』、「落花還繞樹詩菅三品」。

②313秋光変山水 順（山）

順（雲・粘・伊・久・戊・葦）

＊『天徳三年殿上詩合』、「秋光変山水　源順」。

③552遠念賢士風　菅三品（山）

菅三（雲・関・戊）

ナシ（雲切・伊・葦）

菅三品（粘・近・久）

＊『類聚句題抄』、「遠思賢士風　菅三品」。

④321白 或本田（山）

田（行大・唐2）

菅（粘・伊）

田達音（久・戊）

秋暮傍山行 田達音（多）

ナシ（葦）

＊『田氏家集』巻中、「秋暮傍山行」。

右の①・②・③について、山城切と他文献における記載とは一致している。④については山城切では「白」に「或本田」とあり、「田」が注されている。粘葉本類の「菅」は誤りである。なお、雲紙本・関戸本には当該句そのものが存在しない。

また、以下の通り、注記においても本文の場合と同様、山城切と十二世紀書写本群とは共通性を有している。まず、山城切の注記を挙げ、以下、異同を示す。括弧内には当該注記を有する諸伝本の略号を載せる。各項目の末尾には他文献も載せる。

(1) 155貫之（山・戊）

ナシ（雲・関・粘・伊・葦）

＊『寛平御時后宮歌合』、「貫之」。

(2) 468琴惟喬親王（山・葦）

琴（関・粘・法・伊）

ナシ（近）

聴琴弾惟喬親王（久）

惟喬親王（戊）

＊『私注』、「惟喬親王」。

(3) 479送友人帰大梁賦　公乗億（山・久）

送友人帰大梁賦（雲・関・戊）

送友帰大梁賦（粘・法）

ナシ（近・伊・葦）

＊『私注』、「送友人賦 公乗億」。

(4)704英明（山・戊）
名明（雲・粘・近・伊・太・葦）
ナシ（関・安）
菅名明（久）
＊『私注』、「王昭君 源英明」。
(5)720遊女序 以言（山・多）
以言（雲・関・粘・近・伊・安・太・戊・葦）
ナシ（雲切）
見遊女以言（久）
＊『本朝文粋』巻九、「見遊女詩序」。

山城切と戊辰切(1)・(4)、葦手本(2)、久松切(3)、多賀切(5)との一致が確認された。それらのうちの(3)では山城切・久松切に「公乗億」が注されているが[14]、殊に、山城切と久松切・多賀切とは詳細な注記を有するという点において共通している。

以上、注記においても山城切と雲紙本・関戸本の三本のみが同様である事例が確認され、山城切は雲紙本類の系譜上に位置するものであるといえる。ただし、山城切の方が雲紙本類よりも詳細であり、山城切からは異本との校合による書込みもみられ、異本の内容を反映させる姿勢が窺われた。また、注記においても山城切と十二世紀書写本との共通性が確認された。

五

山城切と雲紙本・関戸本とは本文内容の面から近い関係にあり、山城切の本文は雲紙本類の系譜上に位置しているという

ことが改めて確認されたが、山城切は粘葉本類の本文をも有しており、また、注記について、詳細であることが確認された。他本に従い、書き込みがなされ、それらが本文化し、混淆したことによるかと思しき様相も看取された。

山城切と十二世紀書写とされる諸伝本とはいわゆる共通異文をも有しており、横の繋がりも認められた。殊に、山城切と久松切とは詳細な注記を有しており、また、本章中、既述した通り[15]、山城切・戊辰切の本文中の題には付項目「帰雁」・「春氷」が独立した題として存し[16]、撰者である公任の原撰本から変容した形態であるという点において、それら三本は類同的な関係にあると考えられる。その中でも山城切には、後人による追補とみられる詩歌句が七首も存し、そのうちの五首は平安時代書写とされる諸伝本においては山城切独自であって、後世的特徴が顕著である。その性格は豊富な注記や書込み等からも指摘され、当時の研究の成果を意欲的に汲み上げた伝本であるといえる。『和漢朗詠集』はその後、細分化されて研究が進められていくこととなるが、そのような中で山城切は平安時代という比較的早い時点における『和漢朗詠集』の研究書として資料的価値の高い伝本であると考えられる。

注

(1) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一四巻〔平成2年　講談社〕348頁
また、堀部正二氏は「上は天治頃より、下は永暦頃に至る間の書写と考へて大過あるまいと思はれる」とされた（同氏編著『校異和漢朗詠集』〔昭和56年　大学堂書店〕283頁）。

(2) 堀部正二氏編著『校異和漢朗詠集』〔昭和56年　大学堂書店〕334頁

(3) 前掲（注2）に同。323頁

(4) 記述中、「の次」とは『新編国歌大観』に無く、無番号のものを指す。当該番号の詩歌句の次（ここでは92の次）に位置することを意味する。本表記により当該詩歌句の位置を示す。以下、同。

(5) 前掲（注2）に同。314頁
(6) 前掲（注2）に同。329頁
(7) 久曽神昇氏著『仮名古筆の内容的研究』［昭和55年　ひたく書房］189頁
(8) 前掲（注2）に同。330頁
(9) 前掲（注2）に同。329頁
(10) 前掲（注2）に同。322頁
(11) 前掲（注2）に同。328頁
(12) 巻子本には注記が一切省略されている。
(13) 山内潤三・木村晟・朽尾武 諸氏編『和漢朗詠集私注 新典社叢書10』［平成元年　新典社］に拠る。
(14) 三木雅博氏は「平安後期の現存する最も古い『朗詠集』写本群に共通する本文形態」として、唐人の詩句には作者名が記されていても、「原則として」「唐人の賦句のみには作者名が記されない」と述べられた（『和漢朗詠集とその享受』［平成7年　勉誠社］144・145頁）。
(15) 拙稿「戊辰切の位置」（本書〈第三章 第五節〉所収）
(16) 堀部氏はこの事象を「後世的要素」とされた。前掲（注2）に同。322頁